
テイルズオブシンフォニア **【気付いた想い】**

によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブシンフォニア 【気付いた想い】

【Nコード】

N2258Z

【作者名】

こよ

【あらすじ】

むか〜し別のサイトにて上げたテイルズ（シンフォニア）小説です。

こちらのサイトに慣れるためにupさせていただきました。

（ちなみに別サイトでは違うHNを使っていました）

一応三部作予定です。

キャラ崩壊はさせないように気を付けましたが、一部のキャラは崩れているかも？

ジャンルのには恋愛になるのかなあ？ 『こんなカップリングあったらいいな』程度の想いで書いてみた小話です。

不味い文章ですが一読して頂けると光栄です。

【恩と恋】（前書き）

本当に不味い文章ですorz
これ描いたの何年前だったけなあ……

まあ、今書いたとしても劣化物ができあがるのは見えていますけどね！

【恩と恋】

【Main view プレセア・コンバティール】

真っ直ぐな瞳。

真っ直ぐな心。

とても手先が器用で、誰よりも強い心を持つ青年。

そして閉ざされていた私の心を救い出してくれた人

ロイドさん……

いつしか私は彼の行動を目で追うようになっていた。

分からない

異常にまで彼に執着する理由が分からない

最近の私は明らかに異常だ。

それも原因が分からない。

そう思うと激しく不安になった。

だから私は誰かに相談することにした。

問題は誰に相談するかだ。

ロイドさん本人は論外。理由は分からないけど、当人に相談するというのは何か違う気がする。

だとすると、誰が適任か……

私の脳裏には二人の男性の顔が思い浮かんだ。

一人はリーガルさん。

妹の婚約者で、私にも親切にしてくださる頼れる人。

知識も豊富だし、何よりも人柄が良い。相談するなら彼が一番適任だろう。

早速私はリーガルさんの居るレザレノ・カンパニーへ出向くことにした。

だけどいざ行動に出ようと思うと、中々最初の一步が踏み出せずにいた。

脳裏に浮かんだもう一人の姿が、なぜか私の中で大きく膨れ上がっていたからだ。

「……………」

長考の末に、私は一つの決断を下す。

そして私の足は自然に《彼》を探して追い求めている。

**

アルテミラに在する浜辺の一角にて、一人の少年がブツブツと呪

文の詠唱を呟いていた。

銀色の髪を潮風に靡かせ、魔方陣から吹き上がる陣風が浜辺の砂利を震わせる。

少年の名はジーニアス・セイジ。

彼は今新魔法の秘密特訓中であつた。

ジーニアスが現在組み立てている魔法式は中級のものであり、詠唱の言葉と複雑な構成で成る魔方陣が徐々に出て上がって行く。

彼が覚えようとしている新魔法は《サンダー・ブレード》。

初級の《ライトニング》を使い込んだ者が、新たに得ることができるのがこの魔法だ。

彼がこの魔法を覚えようとする理由は、実に子供らしい動機からだった。

「（この魔法さえ覚えれば、僕だって前線で戦うことができる！これで皆を見返して、もう打撃が弱いのだの、体力が無いのだの、防御が薄いだの、すぐ戦闘不能になるだの言わせないっ！）」

むしろ前線に出ることで、逆に打たれ弱さを強調することになる気もしないこともないが、今の彼にはそこまで思考が行き付かない。そもそも《サンダーブレード》は、遠隔作用の近接型魔法のほずである。

よってわざわざ前線に出る必要がないことに気付くのは、彼がこの魔法を習得した後だったというのはまた別の話である。

魔法式を雷属性に構成し、術を土台を創る。

次に彼の魔力を注いで、魔方陣を凝縮する。

これを手の平サイズにまで小さく固めれば完成だ。

ここが一番の集中しどころ。少しでも気を緩めれば魔方陣は消滅

してしまっ。

ジーニアスはゆっくりと魔力を注いでゆき、魔法式を構成

「ジーニアス」

「うわひゃうっ！」

突然背後から掛けられた声に驚いて、ジーニアスは奇声に近い悲鳴を上げていた。

当然魔方阵は台無し。むしろ驚きと共に変な魔力の入れ方をしてしまったせいで、魔方阵はグニヤリと捻曲がり、暴走していた。

「わ……わわっ！」

暴走により魔方阵に注がれていた魔力が逆流し、ジーニアスの身体に降り掛かる。

そして突き飛ばされるように、彼の身体は軽々と宙に待っていた。

「うわあっ！」

「ジーニアスっ！」

声を駆けてきた少女が大きく跳躍して、宙に舞う彼の身体を空中で受け止める。

ただど着地のことまでは考えておらず、ジーニアスを抱いたまま臀部からモロに落ちてしまった。

「……っ」

「えっ？ な、なに……？」

臀部を強打して痛がる少女。

ジーニアスは自分に起きた状況が理解出来ず、ただ呆然と佇んで

「ジーニアス……少し相談したいことがあります」

【main view ジーニアス・セイジ】

び、ビツクリしたなあ。

まさかプレセアの方から僕に尋ねてくるなんて。

それに事故とはいえ、プレセアに抱きしめてもらっちゃって……

不幸中の幸いとは、まさにこのことを言うんだね。

だけどプレセア、どうしてこんな所に？ たまたま僕を見掛けた

から声を掛けてくれたのかなあ？

「ジーニアス……少し相談したいことがあります」

その言葉を聞いた時、僕の身体はビクンツと震え、過敏な反応を示していた。

プレセアが相談したいこと……僕には大よその見当は付いている。

「その……ロイドさんのことなのですが……」

その言葉で推測は核心に変わり、僕は心の中で『ほら来た』と呟いていた。

プレセアがロイドに想いを寄せていることは、薄々感づいていた。いつも彼女を見ている僕だからこそ感づけたのかも知れない。プレセアは僕と話しているだって、いつもロイドのことを目で追っていたから。

その事実を知った時、僕は悲しかった。彼女の心を振り向かせることが出来なかった自分に苛立ったりもした。

だけど不思議なことに、ロイドを憎んだり、邪険にしたりはしなかった。

「うん、話して。プレセア」

自分でも不思議なくらい落ち付いた優しい声。

そして自然な笑みを浮かべられている自分に少し驚いた。

「はい……私、ロイドさんを見ているだけで……こう……胸が締めつけられるような感じがして……苦しくなるんです……やっぱりこれって変……ですよね？」

……うわぁ。そこまで自覚しているのに、どうして結論にまで行き付かないのかなぁ。

プレセアは完全にロイドに夢中なんだね。

「プレセア。結論から言うとね、その症状は十中八九《恋》だよ」

「……こいつ」

「そっ、恋。プレセアはロイドのことが好きなんだね」

「私が……ロイドさんのことを……」

はぁ……それにしてもどうしてよりもよってこんな相談を僕にしてくるかなぁ。

苦しいのは僕も同じなのにな。

「でも……こんな初めてで……ジーニアス、私どうしたらいいの
でしょうか？」

「そ、そうだね。まあ、普通なら恋を自覚したら告白するのがセオ
リーだけれど」

けれど焦るのも良くない、と言おうとした瞬間、プレセアは
急に立ち上がって、拳を握り締めながら瞳に闘志を宿らせていた。

「分かりました！ 告白ですね！ ならば善は急げです！ ジーニ
アス、相談に乗ってくれてありがとうございます」

「えっ？ ちょ」

僕が言いとめるよりも早く、プレセアは烈風の如く素早い動きで
すでに彼方へと走り去っていた。

いや、いくらなんでも行動力ありすぎだよ、プレセア……

「プレセアがロイドに告白……か」

天を仰ぎながら目を瞑り、思想に耽る。

感慨に浸っているわけではない。悔しがつているわけでもない。
言っならば、計り知れない罪悪感に見積もられているんだ。

「……僕ってこんなに酷い奴だったのかな」

虚空に呟かれたその一言は、自分自身に向けた罪悪に対するメッ
セージだったのであろう。

【main view プレセア・コンバティール】

やっぱりジーニアスに相談して正解でした。

彼の助言を無駄にしない為にも、今は告白あるのみです。

そう思っただ直線に動いていた身体であったが、不意に足が止まる。

「そついえば……告白って具体的にはどのような言葉を向けなければいいのでしょつ……」

思考だけが突き走っていて、肝心なことを忘れていた。

もう一度海岸に戻ってジーニアスに……いえ、そんなことでは駄目。

「告白の言葉くらいは……自分で考えないとおつ！」

力を込めながら小さく呟く。

そして思考を巡らせながら、想いを伝える言葉を考える。

……だけど、良い言葉が浮かんでこない。

「いつそ、何も考えずにぶつつけ本番で」

「何の本番なんだ？」

ついノープランな策を口に出してしまった瞬間、突然背後から聞き覚えのある男性の声がした。

ツンツンと逆立つ赤い髪の男性。

私の……想い人。

「ロ、ロロロイドさん！」

「ど、どうしたんだ？ 変にどもったりなんかして……ジーニアスみたいだぞ？」

そういえばジーニアスもよくこんな風に……って、そんなことよ
りっ！

「あ、あの……ロイドさんにお話があるんですっ！」

「ん？ 俺に話？」

ロイドさんはキョトンとしながら、私の瞳の奥を見つめてくる。

その視線で動機が早まる。だけどこれが恋だと自覚した今は、不思議とそれも心地良く感じた。

「……………」

「……………」

だけどいざ想いを伝えようとすると、なかなか言葉が出てこない。喉奥に詰まるようなやるせなさ。それを吐き出すのがこんなに難しいなんて……

ロイドさんも首を傾げながら、ジツと言葉を待っていてくれる。

早く言葉を出さなければ、このままロイドさんに不審がられてしまう。要領の悪い自分を好きな人に晒したくない。

だから私は単純な言葉かつ、想いを伝えるのに最適な言葉を繰り返す。

出すことにした。

「私……ロイドさんのこと好きです!」

言った。言えた。言うことができた。

私の想いを全て込めた言葉。
それを伝えることができた。

「……えっ?」

いくら鈍いロイドさんでも、真っ赤な顔で『好きですっ!』と伝えた言葉を『友達として』なんて受け取ったりはしないだろう。その証拠に、ロイドさんの表情も驚愕なものに変化していた。

「
……」

再び無言の刻が流れる。

今度は私がロイドさんの言葉を待つ番だ。
俯きたくなるくらい恥ずかしい。自分でも認識できるくらい赤面している。

だけど私はロイドさんの瞳から視線を反らそうとはしなかった。

長い沈黙の後、やがてロイドさんは真紅の瞳を真っ直ぐ私に向けてきた。

そして彼は私の告白に対する返事をくれた。

「プレセア……俺」

太陽が西の山に半分以上隠れ、茜色の景色が闇色に染められてゆく時間。

ジーニアスは未だ浜辺の一角に居た。

何をするわけでもなく、沈み行く夕日をただボーッと眺めるだけ。そんな無意味な時間を彼はあれからずっと送っていた。

「はぁ……………」

何度目のため息だろうか。

その数は確実に二桁に達しているだろう。

ジーニアスのため息の原因は、先ほどの受けたプレセアからの相談にあった。

そのことを思い出す度に罪悪感が胸に募り、ため息が流れ出る。

「はぁ……………」

「……………ため息ばかりですね。ジーニアス」

「そりゃあため息も出るよ。プレセアに悪いことをしちゃったなって思うと……………はぁ……………」

「私に？ ジーニアスが私に何か悪いことなりましたか？」

「だって僕はロイドの気持ちも知っていないながら……………って、プレセアッ!？」

何時の間にか自分の隣に座っていた想い人の存在に、ジーニアス

は仰け反るような反応で驚きを示していた。

「……そうでしたか。ジーニアスは知っていたのですね。ロイドさんの気持ちを……」

プレセアは視線を真っ直ぐ海に向け、先ほどのジーニアスと同じように沈み行く夕日をポーッと眺める。

やがてジーニアスも驚愕から冷めると、彼女の隣に座り直し、海岸線を眺めながら言った。

「……うん。ロイドは僕の親友だもん。誰を想っているのかくらい分かる」

「そう……ですよ。ロイドさんがコレットさんを想っていたことくらい……少し考えれば分かるはずでした」

後半の言葉には若干嗚咽が雑じっていた。

プレセアの気持ちは良くわかる。きっと今は自分の顔を見られたくないはずだ。

だからジーニアスは視線を海岸線に向けたまま、ポツリとこう呟いた。

「……ごめんね、プレセア」

「どうして……謝るのですか？」

「僕はロイドの気持ちを知りながら、キミに告白を促すような助言をした。結果的にキミが傷つくことになるかと分かっていたのに……」

ジーニアスは心底悔しそうに言葉を吐いていた。

好きな人を傷つけたのは自分。そう思うと計り知れない罪悪感が彼の心中を掻き雑せる。

そんな悔しさと罪悪感に震える彼の手を、プレセアはやさしく両手で覆っていた。

「ジーニアスのせいではありません」

「僕のせいだ」

「違います」

「違うない」

珍しくプレセアの言葉にも強情な姿勢で否定するジーニアス。
今の彼は完全に卑屈になっている。

たぶん、誰が何を言っても今の彼を元氣付けることは難しいだろう。

「（そう、僕のせいでプレセアは傷ついた。ロイドだってきつと断るのに辛かったはずだ……僕って本当に……って）」

プレセアに握られていた左手に、何やら違和感が走った。
徐々に締めつけられて行くような圧縮感。

「痛っ！ いたたたたっ！ 手が、手があぁっ！ プ、プレセアアッ！？」

気が付くとプレセアは、ジーニアスの手を握りつぶすかのように圧力を加えていた。

当然痛みに悶えるジーニアス。

「ジーニアスのせいではありません」

言っていることとやっている事が食い違っているプレセア。

ジーニアスは半泣きでひたすら悲鳴を上げていた。

「ジーニアスのせいではありません」

再度同じ言葉を放つ。

どうやらプレセアは、彼が納得に至るまで手を離さないつもりだ。

「痛たたたたっ！ わ、分かった！ 分かりましたっ！ 僕のせいではありません！ 卑屈になってごめんなさいいいっ！」

その言葉を聞き入れ、プレセアは満足そうな笑みを浮かべて、ようやく力を緩めた。

だけど相変わらず彼女の手は、彼の左手に添えられていた。

「ふふっ、ごめんなさい。でもジーニアスが悪いんですよ？ 強情になっったりするから……」

「うっ……でもそれは本当に僕が……って、痛たたたたっ！ 何でもないっ！ 何でもないですうっ！」

どうやら彼の左手は、完全に彼女の包囲網の中にあるようであった。

「ジーニアス。私、ロイドさんのことはキツパリ諦めます」

「……………」

プレセアの決意の言葉。

それを聞いたジーニアスは、複雑な表情をしながら彼女の方を見る。

「プレセアはそれで本当に後悔しない？」

「……ええ。私は気持ちを伝えられただけで十分です」

「でも……」

「ジーニアス」

プレセアは無理やり会話を区切り、ジーニアスと顔を合わせた。夕日の影響かも知れないが、その顔はなぜか赤く染まっているように見えた。

「どうやら私の初恋の相手はロイドさんではなかったみたいです」
「……はっ？」

突然の衝撃暴露にジーニアスの目は点になる。

「それがロイドさんに告白をして得ることができた収穫です」
「……ええつと？」

意味が分からず、ジーニアスは怪訝そうな顔で首を傾げた。

「……どういうこと？」

いくら考えても思考が答えに行き付かず、結局考えるのに挫折してその真意を彼女に尋ねた。

だけどプレセアは口を閉ざしたまま立ち上がって、若干いたずらっぽい笑みを浮かべながら、夕日をバックにしてこう言った。

「ジーニアスには秘密です」

【Main view プレセア・コンバティール】

伝えた私の想い。

ロイドさんはその答えを返してくれた。

『プレセア……俺、お前の気持ちには応えられない』
『……っ！』

そう言われた時、私は胸を強く打たれたような痛みに襲われた。自分が欲しかった言葉を貰えなかったショック。その悲しみが痛みとなって私の身体に迸った。

『俺が好きな奴は別にいる。だから……悪い』
『……』

そうでした。

私がロイドさんのことを目で追っていたように……
ロイドさんもコレットさんのことを目で追っていたんだ。

ロイドさんがコレットさんを目で追っていた理由、今の私にはそれがはつきりと分かる。

この人は……ずっと彼女のことを……

『なあ、プレセア。どうして俺なんだ？』
『……えっ？』

突然の質問に、私は俯き気味だった頭を上げて、目を見開きながらロイドさんの顔を見つめていた。

そして私は長考の末に、彼の質問の答えを返した。

『貴方は私の心を救って下さいました。だから私は……』

『確かに俺はお前の心を救い出したかもしれない。だけど、そんなことが《恋》に繋がるものなのか？』

『……っ！……』

言われ、私は頭の中を金槌で叩かれたように思考が揺れた。

『これは俺の推測なんだけどよ。お前は単に俺に《恩》を感じていただけなんじゃないのか？ それを《恋》と勘違いしてしまった』

『……』
『確かに俺はお前の恩人かも知れない。だけど《恩》と《恋》は違う。感情的には似ているかもしれないけど……・違う』

その言葉で私の身体は完全にフリーズしてしまった。

その通りだ。

私はロイドさんに多大な恩を感じている。

その恩はいつか返さなければいけないと私はずっと思っていた。

そっか……

今、分かった……

私がロイドさんを目で追っていた理由

私はロイドさんに恩を返したかったただけだったんだ。

『ロイドさん……私』

『なあ、プレセア』

私の言葉を遮って、ロイドさんが言葉を掛けてくれる。

『俺はお前を《仲間》としてしか見てやれない』

『……はい』

それでいい。

この人は私を仲間と認めてくれる。
十分だった。

『コレットも父さんも先生もゼロスもしいなもリーガルもお前のことを仲間と認めているはずだ』

『はい……』

『だけど、一人だけお前のことを仲間以上の存在として見てくれている奴がいる』

『えっ……？』

『そいつは俺達以上に不器用だから、自分の気持ちをひたすら隠し続けている……まっ、結構バレバレだったりするんだけどな』

苦笑混じりで優しく微笑むロイドさん。

『もし俺への恩を返したいっていうんならさ、少しでもそいつのことを考えてやってくれないか？』

『……』

私を仲間以上の存在として見てくれている人。

刹那に一人の男性の顔が大きく浮かび上がった。

その人はいつも私の側に居てくれた。

その人はこんな私の悩みを文句一つ言わず訊いてくれた。

その人は私に勇気を与えてくれた。

「まっ、俺が言いたいのはそれだけだ。後はプレセアの気持ち次第だ」

それだけ言い残すと、ロイドさんは早々と立ち去っていった。

一人になった私は、その場に突っ立ったまま思考に耽る。

考えるのは、海岸で魔法練習をしていた彼の事。

「……………」

なぜか頬が上気する。

なぜか心臓が鳴り響く。

なぜか彼の顔が脳裏に妬き付いて離れない。

そうか……………これが……………

これが恋なのですね。

初めて恋を自覚した私は、再び彼を探して追い求める。

この初恋を決して逃さない為に

【恩と恋】（後書き）

とりあえず第一部はこの辺で。

読んでくれてありがとうございました！

そして見辛い文章ですみませんorz

続きは近いうちに上げます！

3部作予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2258z/>

テイルズオブシンフォニア 【気付いた想い】

2011年12月8日02時01分発行